

トマス・アクィナス
『諸元素の混合について』
—試訳—

石田 隆太

凡例

- ・ 訳出にあたっては次のレオ版のテキストを底本とした。

Sancti Thomae Aquino, Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita, tom. 43, Roma: Editori di san Tommaso, 1976, 155–57.

- ・ 参照した現代語訳は次のとおりである。

Bandel, M., “Sur le mélange des éléments, a maître Philippe,” in M. Védrine, M. Bandel, & M. Fournet, *Opuscles de saint Thomas d’Aquin*, tom. 4, Paris: Librairie de Louis Vivès, 1857, 41–45. 【フランス語訳】

Larkin, Vincent R., “Saint Thomas Aquinas: “On The Combining of the Elements”,” *Isis* 51 (1) (1960): 67–72. 【英語訳①】

McDermott, Timothy, “How Elements are Present within Compounds,” in Thomas Aquinas, *Selected Philosophical Writings*, tr. Timothy McDermott, Oxford: Oxford University Press, 1993, 117–21. 【英語訳②】

Bobik, Joseph, “De Mixtione Elementorum,” in Joseph Bobik, *Aquinas on Matter and Form and the Elements: A Translation and Interpretation of the De Principiis Naturae and the De Mixtione Elementorum of St. Thomas Aquinas*, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 1998, 101–26. 【英語訳③】

Aguinalde Sáenz, Ignacio, “Sobre la combinación de los elementos, al maestro Felipe de Castrocaeli,” in Tomás de Aquino, *Comentario al libro de Aristóteles sobre la generación y la corrupción, los principios de la naturaleza y otros opúsculos cosmológicos*, tr. Ignacio Aguinalde Sáenz & Bienvenido Turiel, Pamplona: Ediciones Universidad de Navarra, 2005, 193–200. 【スペイン語訳】

はじめに

トマス・アクィナスの小著『諸元素の混合について』(*De mixtione elementorum*, 以下では『混合について』と略記)は、彼の第2回パリ大学教授時代(1268–72)に属するものであり、かつての学友でもあったカストロチェーロのフィリップスからの要請で書かれた意見書の一つである。その内容は基本的に自然学の領域に属する。アンネリーゼ・マイアーが論じているように¹、アリストテレスの『生成と消滅について』に主として由来する問題として、諸元素が混合物体においてどのように存在しているのかという問題がスコラ学では議論された。この問題は、諸元素の実体形相が混合された後にどうになってしまうのかという問題でもある。この問題に対する古典的な解決策は三つ知られている。第一は、諸元素の実体形相が存続することを素朴に認めるアヴィセンナの解決策である。第二は、諸元素の実体形相が実体形相とも附帯形相とも異なる中間的な形相として存続することを主張するアヴェロエスの解決策である。第三は、諸元素の実体形相が現実的にではなくて力(virtus)として存在することを主張するトマスの解決策である。『混合について』ではまさにこうした論争的な状況を見ることができる。

『混合について』の内容全体は、次のように整理することができる。

【1】全体の導入

【2】実体形相存続説(アヴィセンナ)の提示

【2-1】論拠①：諸元素の消滅を問題視

【2-2】論拠②：諸元素による複合の不可能性を問題視

【2-3】批判①：複数の物体が質料の同一の部分に内在できないことを指摘

【2-4】批判②：対立する諸性質が同一の部分に内在できないことを指摘

【3】中間形相説(アヴェロエス)の提示(中間形相の存在とそれの大小の受け入れ可能性)

¹ Anneliese Maier, *An der Grenze von Scholastik und Naturwissenschaft*, 2 ed., Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 1952, 1–140.

- 【3-1】 批判①：実体と附帯性が肯定と否定の関係性にあることを指摘
- 【3-2】 批判②：実体と附帯性が同じ類にないことを指摘
- 【3-3】 批判③：大小を受け入れる形相の変化が附帯性にかぎられることを指摘
- 【3-4】 批判④：大小の相異が種的な相異を意味することを指摘
- 【4】 第三の立場（トマス）の導入
 - 【4-1】 論拠：諸元素の性質が混合体において力として存続することを主張
 - 【4-2】 結論の提示と、アリストテレスの引用による補強

続いて、以上の【 】による番号づけを便宜的に用いながら、『混合について』の全訳を提示することにした。

試訳

諸元素の混合について 教師カストロチェーロのフィリップスに宛てて

- 【1】 多くの人々のあいだで、どのようにして諸元素は混合体においてあるのかという疑問が常に存在している。
- 【2】 さて、或る人々に思われていることには、諸元素の能動的および受動的な性質が変質によって中間物に何らかの仕方で還元されても、諸元素の実体形相は存続する²。【2-1】 理由は以下のとおりである³。もし諸々の実体形相が存続

² アリストテレスの『生成と消滅について』第2巻によれば、熱 (θερμόν, calidum) と冷 (ψυχρόν, frigidum) は能動的な性質であるのに対して、乾 (ξηρόν, siccum) と湿 (ύγρόν, humidum) は受動的な性質である (329b24–26)。そして、火は熱くて乾いており、空気は熱くて湿っており、水は冷たくて湿っており、土は冷たくて乾いている (330b3–5)。

【2】 で言われている立場によれば、火、空気、水、土という四元素が混合されることでその諸性質が変質をこうむっても、それとは別に諸元素の実体形相はそのまま残存する。レオ版の注では、この立場を保持する者としてアヴィセンナの名が筆頭に挙げられている (155, adn. 1. 3)。

³ トマスは以下で、【2】 において提示された説の論拠を二つ示している。この二つはそれぞれ、トマスから見れば「異論」に相当する。【2-1】 が「第1異論」であり【2-2】 が「第2異論」である。

しないなら、諸元素の何らかの消滅があるのであって、混合があるのではないことになると思われる⁴。

【2-2】さらには、もし混合物体の実体形相が質料の現実態であるとして、諸々の単純物体〔すなわち諸元素〕の〔実体〕形相が前提されないと、諸々の単純物体は諸元素の理拠〔ratio〕を放棄する。すなわち、元素とは或るものがそれから最初に複合される場所のものでありその或るもののうちに存在し種に即して不可分であるということを放棄する⁵。というのも、諸々の実体形相が〔諸元素から〕取り除かれると、混合物体において〔諸元素の〕諸々の実体形相が存続するようにして混合物体が諸々の単純物体から複合されるのではないことになるからである⁶。

【2-3】さて、そうであることは不可能である。理由は以下のとおりである⁷。質料が同じものに即して諸元素の相異なる形相を受け入れることは不可能である。したがって、もし混合物体において諸元素の実体形相が保たれるとするなら、質料の相異なる部分に諸々の実体形相が内在しなければならないことになる。ところで、質料において量があらかじめ知解されるのでないかぎり、質料の相異なる部分を受けとることは不可能である。というのも、『自然学』第1巻〔185b16〕で明らかなように、量が除去されると実体は不可分なまま存続するからである。そして、量の下に存する質料と〔その質料に〕到来する実体形相から自然学的な物体は構成される。したがって、諸元素の形相によって自存する質料の相異なる部分は、複数の物体の理拠を受け入れる。ところで、多数の物体がともにあることは不可能である。したがって、四元素が混合物体のいかなる部分においてもあるわけではないことになる。かくして、小ささのゆえに

⁴ 「第1異論」によれば、仮に諸元素の実体形相が存続しないとすると、その時点で諸元素は消滅していることになり、そもそも諸元素の混合がありえないことになる。

⁵ Cf. アリストテレス『形而上学』第5巻（1014a26-27）。

⁶ 「第2異論」によれば、仮に諸元素の実体形相が存続しないとすると、諸元素は自らの理拠を失うことになり、結果として、混合物体が諸元素によって複合されることが不可能になってしまう。

⁷ 二つの「異論」に対してトマスは、ただちに「異論解答」を二つ示している。これはどちらも、「第1異論」に対する「第1異論解答」や「第2異論」に対する「第2異論解答」というよりは、アヴィセンナの説そのものに対する異論解答として理解できるものである。それによれば、諸元素の実体形相が存続すると考える方が、真の混合ではなくて見せかけの混合しか生じないことを示していることになる。

感覚されえない諸物体の集積において生じるようにして、真の混合ではなく感覚に即した混合があることになる⁸。

【2-4】くわえて、あらゆる実体形相は質料において、[自らが]それなしには存在しえない固有な態勢 [dispositio] を要求する。それゆえ、変質は生成消滅への途中である。ところで、火の形相に対して要求される固有な態勢と水の形相に対して要求される固有な態勢が同じものへと合致することは不可能である。なぜなら、こうした諸々の態勢に即しては、火と水は反対のものだからである。ところで、反対のものどもが同じものにおいてあることは不可能である。したがって、混合体の同じ部分において火と水の実体形相があることは不可能である。したがって、もし混合体が、諸々の単純物体の実体形相が残存しながらも生じるとするなら、小さきのゆえに感覚されえない諸部分がいわば相互に置かれるようにして、真の混合ではなく感覚にとっての混合のみがあるということが帰結する⁹。

⁸ 最初の「異論解答」によれば、まず、質料が諸元素の異なる実体形相を同一の部分において同時に受容することはできない。これは、質料の或る部分には一つの実体形相しか受容されないことを前提としている。この前提の下では、諸元素の実体形相が混合物体においても存続すると仮定する場合、諸元素の実体形相は質料の異なる部分に受容されることになる。ところで、質料が異なる部分になるためには量による分割を必要とする。そして、量の下に存在する質料とその質料に到来する形相から構成されるのが自然界にある物体である。したがって、実体形相存続説を仮定する場合には、諸元素（すなわち単純物体）の実体形相を受容している質料の各部分はそれぞれ量的に区別されたものとして存在しており、混合物体のなかには複数の物体が存在することになる。ところで、複数の物体が同一の場所に同時に存在することはできない。したがって、諸元素は混合物体において、それぞれが異なる部分にのみ存在することになる。そうなることは、真の混合というよりは見せかけの混合にすぎない。すなわち諸元素は、一定の比率の下に融合して一つの混合体をなしているというよりは、或る特定の場においてただ集積しているものにすぎなくなる。このようにしてトマスは、アヴィセンナの説の方がむしろ真の混合を保持できないという困難を指摘する。

⁹ 次の「異論解答」は、アヴィセンナの説がもつ困難を別の仕方で指摘する。まず、あらゆる実体形相は質料において固有な態勢を要求する。これは、実体形相が質料に対して自らを受容するのにふさわしい状態を求めるということである。ところで、火の形相と水の形相とでは、質料の側に要求する固有な態勢が異なる。それらの固有な態勢が具体的に何であるかをここでトマスは語っていないが、後述の箇所（【4-1】）から窺えるように、諸元素がもつ性質のことを想定すればよい。すなわち、火であれば熱と乾、水であれば冷と湿である。このように、火と水は能動的な性質においても受動的な性質においても正反対のものである。ところで、正反対のものが同一のものに内在することはできない。したがって、火の実体形相と水の実体形相が混合物体において同一の部分に内在することはできない。かくして、もし実体形相存続説を仮定す

【3】他方で、或る人々は〔アヴィセンナの説を肯定ないし否定する〕両方の議論を避けようとして、より大きな不都合に陥った。すなわち彼らは、混合を諸元素の消滅から区別するために、諸元素の実体形相は何らかの仕方で混合体に残存すると言った。だが彼らはさらに、感覚に対する混合があるのであってそれは真理に即してはいないと言うことを強いられることがないように、諸元素の形相はその完成体に即して混合体において存続するのではなくて、〔混合体においては〕何らかの中間物に還元されると措定した。すなわち彼らが言うことには、諸元素の〔実体〕形相は大小を受け入れ、相互に反対性をもつ。だがこうしたことは明白に、共通意見と、『範疇論』[3b24; 33-34]で実体のうちに反対するものは全くなくて実体は大小を受容しないと言うアリストテレスの諸言明とに抵触するのだから、彼らはさらに進んで言う。すなわち、諸元素の形相は、第一質料により接近しているかぎりでは〔第一質料以外で〕最も不完全である。それゆえ、実体形相と附帯形相のあいだには諸々の中間形相があり、かくして、それらは附帯形相の本性に近づくかぎりで大小を受け入れることができる¹⁰。

【3-1】さて、この立場は複数の仕方で反証されうるものである。まず第一には、実体と附帯性のあいだに中間的な何かがあることは全くもって不可能だからである。理由は次のとおりである。肯定と否定のあいだに中間的な何かがあることになってしまう。というのも、附帯性に固有なのは基体に内在することであるのに対して、実体に固有なのは基体に内在しないことだからである。ところで、諸々の実体形相は、たしかに質料には内在するが基体には内在しない。というのは、基体はこの或るものである一方で、実体形相はこの或るものをあ

るなら、火と水は混合体において相互に融合することなく存在することになり、やはり見せかけの混合だけがあることになる。

¹⁰ ここでトマスは、自分とは異なる立場の二つ目を提示する。それによれば、混合体において諸元素の実体形相は実体形相でも附帯形相でもないいわば第三の中間的な形相として存続する。トマスによれば、そうした「中間形相」が実体形相とは異なり大小を受け入れることができるという点もこの立場の考えのなかにある。すなわちこの説は、中間形相が存在することだけではなくて、中間形相が大小を受け入れ可能であることをも重要な要素としてもつ（とトマスは理解している）。それゆえ、この二つの要素がそれぞれトマスによる「異論解答」で批判されることになる。そしてこの批判が向けられている人物は、レオ版の注でも指摘されているように、アヴェロエスである（155, adn. l. 53）。

らしめるものであってそれを前提するのではないからである¹¹。

【3-2】また、一つの類に属するのではないもののあいだに中間物があると言うことはばかげており、それは〔アリストテレスの〕『形而上学』第 10 巻 [1057a19-20; a33-b1] で証明されるとおりである。というのも、中間物と両極は同じ類のなかにあるのでなければならないからである。したがって、実体と附帯性のあいだにはいかなる中間物もありえない¹²。

【3-3】 ついで、諸元素の実体形相が大小を受け入れることは不可能である。理由は次のとおりである。大小を受け入れる形相はすべて附帯的に可分的である。すなわち、基体はその形相をより多くまたはより少なく分有できるかぎりそうである¹³。ところで、『自然学』第 6 巻 [234b10-20] で明らかなように、自

¹¹ 中間形相の存在を直接的に批判する「第 1 異論解答」によれば、仮に実体と附帯性のあいだに何か中間のものが存在することを認めるなら、肯定と否定のあいだの中間を認めることになってしまう。なぜなら、附帯性は基体に内在するものであり、実体は基体に内在しないものであるから、これらは真逆のものであり、中間のものは存在しないはずだからである。ところで、以上のことは実体形相と附帯形相にも当てはまる。なぜなら、実体形相は質料には内在するが基体には内在せず、むしろ基体に内在するのは附帯形相だからである。つまり基体に対する内在をめぐって、実体形相と附帯形相は否定と肯定の関係にある。それゆえ、トマスはこの結論部分を省略しているが、形相に関しても実体形相と附帯形相の中間物はありません。

¹² 中間形相の存在に関する「第 2 異論解答」によれば、まず、一つの共通な類に属していないもののあいだに中間があると言うことはおかしい。ここで「中間」は、同じ類における両極のあいだにあるものだと考えられている。それゆえ、実体と附帯性とはそもそも類が異なるので、これらのあいだに中間物はありません。トマスの解答はこれで終わっているが、さきほどの「異論解答」を考慮すると、次のように補うのが適切であろう。さて、実体形相は実体のものであり、附帯形相は附帯性のものである。それゆえ、実体形相と附帯形相についても中間物が存在することはありえない、と。

¹³ 「大小を受け入れる形相は」から始まる前提をトマスは自明のこととして導入しているが、これを理解するためにはいくつかの事項をここで補足しなければならない。この前提においては、附帯性の一つである性質のなかには大小を受け入れるものがあるということと、それが附帯的に分割をこうむるということの二つが重要である。前者はアリストテレスの『カテゴリー論』(10b26-11a19) に由来する論点であり、後者は彼の『自然学』第 6 巻 (236a35-b18) に由来する論点である。

前者については、『神学大全』第 2-1 部第 52 問題第 1 項が参考になる。この項でトマスは、カテゴリーでは性質に属する習態 (*habitus*) が増強するか否かを問題にし、増強の可能性を認めている。彼は、その論拠を示す主文において、シンプリキオスによる『カテゴリー論注解』を参照しながら、実体形相や附帯性の一つである量は大小を受け入れないが、性質の形相は大小を受け入れる可能性があることを述べている (レオ版第 6 巻, 331a)。トマスが参照しているシンプリキオスによる注解の具体例を用いれば次のとおりである (CAG, vol. 8, 285, 9-286, 4)。実体のカテゴリーに属する「人間」

体的あるいは附帶的に可分的であるものに即しては、運動が連続的であることがありうる。というのも、場所変化、増大、減少は量と場所に即していて、量と場所は自体的に可分的である一方で、変質は諸性質に即していて、諸性質は熱いものや白いもののように大小を受け入れるからである。したがって、もし諸元素の形相が大小を受け入れるなら、諸元素の生成も消滅も連続的な運動であることになるが、これは不可能である。というのは、『自然学』第5巻[225b7-9; 226a24-b10]で証明されるように、連続的な運動は量、性質、場所という三つの類においてのみあるからである¹⁴。

【3-4】くわえて、実体形相に即したあらゆる差異は種を多様にする。ところで、大小を受容するものは、より大きいものを、[それよりも]より小さくてそれと何らかの仕方で相反するものから差異化する。それは、より多く白いもの

は、あらゆる個別の人間に認められるが、或る一人の人間が他の人間よりもより多く人間であるといったことはない。量や関係のカテゴリーに属するものも同様である。例えば、2に対する4と1に対する2という関係においては「二倍」という関係が共通して見られるものの、一方に見られる「二倍」が他方のそれよりもより二倍であるとは言えない。それに対して、白さや甘さという性質については大小という程度を認めることができる。

後者については、アリストテレスの『自然学』第6巻に対するトマスの注解(第7講)が参考になる(レオ版第2巻, 296ab)。この注解によれば、白いものの附帶的な分割には二通りありうる。一つは量的な部分に即した分割であり、例えば白い表面が二つの部分に分割されるといったことである。すなわち、基体の側のあり方に即して白いものが附帶的に分割されている。もう一つは性質の強弱(intensio et remissio)に即した分割である。トマスによれば、或る同一の部分がより多く白であったりより少なく白であったりするものは、白さの理拠そのものに由来することではない。なぜなら、白さの形相を仮に離在するものとして想定すると、その形相が大小を受け入れるとは言わないからであり、それは実体が大小を受け入れないのと同様である。むしろ、或るものがより多くないしより少なく白であることは基体の側に由来する。トマスの言葉で言うと、「可分的な基体の側で白さを分有する相異なるあり方」に由来する。

¹⁴ 中間形相が大小を受け入れ可能であることを批判する「第1異論解答」によれば、まず、「大小を受け入れる形相はすべて附帶的に可分的である。すなわち、基体はその形相をより多くまたはより少なく分有できるかぎりそうである」(この内実については前注を見よ)。次に彼が言うのは、自体的にであれ附帶的にであれ可分的であるものに即しては、連続的な運動(ないし変化)がありうるということである。例えば、自体的に可分的である量と場所に即した場所変化、増大、減少がそうであり、附帶的に可分的である性質に即した変質もそうである。それゆえ、もし諸元素の形相が中間形相として大小を受け入れることになるなら、本来は実体変化である諸元素の生成消滅が、連続的な運動をこうむる附帶性の変化であることになってしまう。すなわち諸元素の形相はやはり附帯形相にすぎないことになってしまう。したがって、諸元素の形相が大小を受け入れるということが棄却される。

とより少なく白いものの場合のようである。したがって、もし火の形相が大小を受け入れるとするなら、より多く生じた形相であってもより少なく生じた形相であっても種を多様にすることになり、それは同じ形相ではなくて別の形相であることになる。そのようなわけで、哲学者 [アリストテレス] が『形而上学』第 8 卷 [1043b36–1044a2] で言うことには、諸々の数において種が付加と除去によって多様化されるのと同様に、諸々の実体においてもそうである¹⁵。

【4】したがって、それによって混合についての真理も保たれ、諸元素もやはり全面的に消滅するわけではなくて或る仕方で混合体において残存するような他の仕方を見出さなければならない¹⁶。

【4-1】したがって、以下のことが考慮されるべきである。諸元素の能動的および受動的な性質は互いに相反しており、大小を受容する。ところで、大小を受容する諸々の相反する性質からは、両極端の本性の味わいをもつような中間的な性質が構成されうる。例えば、白いものと黒いものから青白いもの [pallidum] が、熱いものと冷たいものから温かいもの [tepidum] が構成されうる。そのようなわけで、元素の諸性質の卓越性が弱められることで、混合物体に固有な性質である何らかの中間的な性質がその諸性質から構成されるが、それは混合の相異なる比率に応じて相異なる混合物体で異なっている。そしてたしかにこの中間的な性質は、単純な性質が単純物体の形相に対してそうであるように、混合物体の形相に対する固有な態勢である。したがって、両極端の本性を分有する中間物において両極が見出されるのと同様にして、単純物体の諸性質は混合物体に固有な性質において見出される。ところで、単純物体の性

¹⁵ 大小の受け入れ可能性をめぐる「第 2 異論解答」によれば、まず、実体形相による差異は種の違いを意味する。ところで、性質に見られるような大小の違いにおいても、大小を受容するそれぞれのものの種的な違いが見られるとトマスは言う。彼はより多く白いもの (magis album) とより少なく白いもの (minus album) という例しか挙げていないが、前者を「白 1 号」とし後者を「白 2 号」と仮に命名するなら、白という共通な類に対して何らかの種差を付加すると「白 1 号」ないし「白 2 号」になるという構図が想定されていると思われる。したがって、もし中間形相としての火の形相が大小を受け入れることができるなら、それは単純物体としての火がもっていた実体形相とは異なるものになってしまう。議論としてはこれで終わりにしてもよいところだが、最後にアリストテレスの『形而上学』第 8 卷から引用することによって、トマスは、数的な相異なる場合を除いて形相の相異なるが基本的に種的な相異なるを意味することを強調している。

¹⁶ トマスは、いよいよ自身の立場を示すにいたる。

質は、たしかにその実体形相とは別であるものの、実体形相の力 [virtus] において能動する。さもなければ、熱はただ熱するだけであって、熱の能動によって実体形相が現実態へと引き出されないことになっただろう。というのも、何ものも自らの種を越えて能動しないからである。そのようなわけで、諸々の単純物体の実体形相の力は混合物体において保たれる¹⁷。

【4-2】したがって、諸元素の [実体] 形相は混合物体においてあるが、現実態ではなくて力によってである。そしてこれこそアリストテレスが『生成 [と消滅] について』第1巻 [327b29-31] で言っていることである。「したがってそれらは、すなわち混合体における諸元素は、物体や白いもののように現実態において存続するのではないが、片方が消滅するのでも両方が消滅するのでもない。というのも、それらの力が保たれるからである」¹⁸。

おわりに

『混合について』については並行箇所もいくつか存在するが、トマスの最終的な立場は『ボエティウス「三位一体論」注解』（第4問題第3項第6異論解答）ですでに確立されている¹⁹。ここでは、彼の最終的な立場がすでに確立され

¹⁷ まず、諸元素の性質は大小を受容するものであり、それから中間的な性質が構成されることがある。例えば、白と黒からは青白が、熱と冷からは温が構成されうる。かくして、諸元素の混合体においては、諸元素が本来もっていた性質にもとづいて、その混合体にもふさわしい中間的な性質が構成される。そしてこの中間的な性質こそ、混合体の形相に対する固有な態勢である。このようにして、諸元素のそれぞれにおいて本来は卓越性として存在していた諸性質は、混合体のなかでは新たな態勢の下に存在することになる。ところで、諸元素の性質は、そのものが諸元素の実体形相であるわけではないが、「実体形相の力において能動する」。トマスは例として熱という能動的な性質のことを考えている。熱そのものは、例えば火の実体形相ではなくて性質にすぎないものの、熱によって火は他のものを自らと同じものにするよう能動する。かくしてトマスは、諸元素の性質がもつこうした力が混合体においても存続することを認めるにいたる。

¹⁸ 混合体において諸元素の実体形相は存続するののかという問題に対する最終的な結論が示される。また、「力」を意味するラテン語である《virtus》がアリストテレスの『生成と消滅について』第1巻に由来することも明示される。《virtus》の原語は《δύναμις》である。

¹⁹ Ignacio Aguinalde Sáenz, “Sobre la combinación de los elementos,” 195n2. 『ボエティウス「三位一体論」注解』のこの箇所の日本語訳は次のとおり：『神秘と学知——『ボエティウス「三位一体論」に寄せて』翻訳と研究』, 長倉久子=訳註, 創文社, 1996年, 330頁。

ている並行箇所の中からも、日本語訳がまだ公刊されていない二つの箇所の訳を参考資料として提示することで、本稿を締めくくりにしたい²⁰。

①『定期討論集 魂について』第9問題第10異論解答

魂が媒介を通じて物的な質料と合一しているかどうかを問うこの問題の第10異論は、混合体においては諸元素の実体形相が残存する必要を主張していた²¹。これに対する異論解答は次のとおりである。

第十に対しては次のことが言われるべきである。諸々の元素の形相は、アヴィセンナがそうしたことを措定したものの、自らの本質に即して混合体において現実態によってある、のではない。理由は次のとおりである。その諸形相は質料の或る一つの部分において存在することができない。ところで、もしそれらが相異なる部分においてあるとしたなら、真なる混合であるところの全体に即した混合があるのではなくて、感覚にとっての混合であるところの最小限の混合があることになっただろう。また、アヴェロエスが言うように、諸元素の形相は大小を受容すると言うことはばかげている。というのも、諸々の実体形相とは、大小を受容することができないものだからである。また、彼が思い描くようには、実体と附帯性のあいだに中間的な何かがあるのでもない。さらにまた、それら〔諸元素の実体形相〕は全面的に消滅するのではなくて、アリストテレスが言うように、力によって存続するということが言われるべきである。そしてこれは、諸元素に固有な附帯性が或る仕方に即して存続するかぎりでのことであり、その諸々の附帯性においては諸元素の力が存続している²²。

②『第1任意討論集』第4問題第1項第3異論解答

理性的な魂の到来によってそれより前にあったあらゆる形相が排除されるの

²⁰ 日本語訳がすでに公刊されている他の並行箇所は、『神学大全』第1部第76問題第4項第4異論解答である。この箇所の日本語訳は次のとおり：『神学大全 VI』、高田三郎、大鹿一正＝訳、創文社、1969年、63-64頁。

²¹ レオ版第24巻第1冊、78, 79-84。

²² 同、85, 451-67。

かを問うこの項の第3異論は、諸元素の混合が生じるためには諸元素の実体形相が残存している必要があることを主張していた²³。これに対する異論解答は次のとおりである。

第三に対しては次のことが言われるべきである。アヴィセンナは、諸元素の形相が混合体において現実態によって残存すると措定したが、これはありえない。理由は次のとおりである。諸元素の形相は質料の或る一つの部分においてともにあることはできない。かくして、その諸形相は質料の相異なる部分においてなければならないが、その部分は次元量の分割に即して区別される。かくして、複数の物体がともにあるのでなければならない。あるいは、相互に置かれた最小限のものどもに即した、感覚に与る混合があるのでなければならない。他方で、アヴェロエスが『天界について』第3巻〔に対する第67注解〕で言うことには、諸元素の形相は附帯形相と実体形相の中間的なものであり、そしてそれらは大小を受容するのであるからして、諸元素の形相が弱体化して何らかの仕方で中間物に還元される時、混合が何らかの仕方で生じる。だが、これもまた最初のものとは比べて一層不可能である。理由は次のとおりである。実体形相は種的な存在の何らかの終極である。それゆえ、数や形の理拠のようにして形相の理拠は不可分なものにおいてある。そして、実体形相が強化されたり弱体化されたりすることも不可能である。むしろ、あらゆる付加ないし除去は別の種を作る。そしてそれゆえ、『生成〔と消滅〕について』第1巻における哲学者〔アリストテレス〕にしたがって、他に次のことが言われるべきである。混合されうるものどもの形相が混合体において存続するのは、現実態によってではなくて力によってである。すなわち、実体形相が弱体化していれば中間物に還元されるとはいえ、実体形相の力が元素の性質において存続するかぎりでのことである。というのも、元素の性質は実体形相の力において能動するからである。さもなければ、火の熱による能動は実体形相へと終極づけられないことになってしまうだろう²⁴。

²³ レオ版第25巻第2冊, 183, 30–34.

²⁴ 同, 184–85, 124–52.

謝辞：本稿は、JSPS 科研費 18K12191 の助成を受けたものである。また、『混合について』の試訳作成にあたっては内山真莉子，小沢隆之，小山田圭一，本間裕之の各氏による協力を得た。さらに本稿の大部分は，京大中世哲学研究会の第 262 回研究会（2020 年 7 月 18 日）での発表原稿にもとづく。最後に，本稿に関わるいくつかの文献を入手するにあたって，ローマ留学中の菅原領二氏から助けを借りた。本稿を作成するにあたり助力を得た各位に，この場を借りて感謝したい。